

近江醒井の泡子塚伝説

小林 幸夫

はじめに

平成十一年に初めて醒井を訪れ、西行伝承の調査を行った。夏に当地で行う西行伝承研究会の事前調査だった。地元の市川義夫氏に案内されて、さまざまな知見を得、新しい資料を見つけることもできた。八月の西行伝承研究会の成果もふまえて、何とか形にして報告したいと思いつながら、いたずらに時だけが過ぎた。このたび花部英雄氏が研究会の調査にもとづいて、「西行泡子塚伝説と赤子塚」という論考を『西行伝説の説話・伝承学的研究（第二次）』に寄せられた。多くの類話を集めて、泡子塚を赤子塚の民俗と伝承のうちに考察したものである。泡子の伝承が、『実晩記』という室町後期の文献に見えることも驚きであった。花部氏の仕事に教えられながら、せめて醒井の泡子塚伝説の性格だけでも明らかにして、今後の研究の課題としたいと思った。調査の中間報告であるが、地蔵川の清流を歩いた実感が消えないうちに書きとめておきたい。

（一）醒井の地蔵と加茂大明神

滋賀県坂田郡米原町の醒井は、かつての中山道の宿場町であり、醒

井川の流れる街道筋は、昔の面影を残している。江戸時代に刷られた「醒井三水四石絵図」を開けば、兜薫山の麓を流れる天野川と、それに平行して走る街道がえがかれており、その中心に地蔵堂がある。この御堂の前には、居醒の清水とよばれる清泉があり、醒井という地名はこれに由来するといわれている。『日本書紀』によれば、日本武尊が伊吹山で大蛇の毒を受けたとき、この泉で冷やすと、たちまちその熱の病は癒えた。それよりこの泉は、居醒の清水とよばれるようになったという。

右の日本武尊の伝承は、『延命地蔵略縁起』（慶長十三年奥書）にも載せられている。その版本は『三水四石井泡兒墓由来記』とともに醒井の法善寺（浄土真宗）に所蔵されている。そして『醒井三水四石由来』が市川義夫氏のもとに所蔵されている。これらはすでに『西行伝説の説話・伝承学的研究（第二次）』に翻刻紹介しておいた。『三水四石井泡兒墓由来記』にある「文亀三年」（一五〇三）の奥書については検討を要するが、いまここでは触れない。

『延命地蔵略縁起』によれば、弘仁八年（八一七）の大干魃のとき、比叡山で降雨を祈願していた伝教大師（最澄）が、薬師如来のお告げにより醒井に来たところ、加茂大明神の託宣があって、地蔵菩薩の像を彫り、降雨を祈誓した。するとたちどころに三日の間、大雨が降り続いたという。

大師此所にイ給ふに鬚髮雪のごとく眉目鮮に白砂の装束したる老翁忽然と顕れ、大師に謂て曰、今天下旱魃の殃有。妖孽競起て五穀登らず。禽獸人に逼黎民飢渴して、獸蹄鳥跡中国に横ふ。帝是を愁い雨を祈、妖孽を鎮めん事を命じたまふ。汝、今勅に応じ此泉源に來れり。願は地蔵尊の像を刻て此源に置け。夫、地蔵尊は重苦の有情を悲、六道の街に現じ、抜苦与樂代受苦の願を余尊に超過し給へり。今、此尊像を彫刻せば、忽に旱魃妖孽の苦をまぬかれ、遠くは末代の衆生に寿福を満足せしめ、永劫三途の苦を脱し真無漏の因を成したまはん。我は此水の守護、別雷神なりとたちまち水中に入たまへば、扱こそ水神の告なりと急ぎ菩薩の尊像を彫刻して、天下の患を脱せんに、工業の迅速にならざる事を歎たまふ。

最澄に託宣した別雷神は、醒井の産土、加茂大明神であり、居醒の清水の守護神として祀られてきた。別雷の神が影向したという石が今も残っている。その社地はかつて兜薫山にあったが、昭和三十四年に居醒の清水の上の山に移された。『近江国輿地志略』は、

醒井の水は、源、美濃国養老の滝より出て、此醒井の清泉となり、亦志賀の柳か崎に出、亦伝通して三條の柳の水に出る

と記す。もちろん俗説であるが、醒井の水にまつわる伝承が、さまざまに語られるその一例である。最澄作と伝える地蔵尊もかつてこの清水の中にあり、「尻冷やしの地蔵」といった（『近江国輿地志略』）。鎌倉時代の禅僧、禅爾涼燠の「禅爾和尚涼燠伝草案」に、

近江州ノ醒井ニ等仁ノ石地蔵ヲ造立シ、開眼供養ヲ待ツ。都鄙ニ隠レ無キ禅爾ニ請ヒテ供養ヲ成ス。此ノ醒井ノ流水ノ上ニ石像ヲ居ヘ、露落懸水シテ、湖水ニ流入ル鱗ニ、結縁セシメントス。

（原漢文）

とあることからすれば、この地蔵の制作年代は鎌倉時代と考えられる。京都法金剛院の律僧禅爾和尚によって開眼供養された地蔵は、清流に

据えられて、琵琶湖に流れ入る魚類とも結縁をはたしたという。慶長十三年、この地蔵尊は、大垣城主石川日向守によって建立された堂宇に移された。それ以来この地蔵さまは、陸に上がって居醒の清水のそばに立っている。それまでは長らく清流のなかであって、尻を冷やしておられたのだ。

（二）泡子の墓

醒井には「三水四石」にまつわる伝説がある。三水とは、先に述べた居醒の清水、淨蔵貴所が結縁した十王水、そして泡子塚の伝説をもつ西行水。四石とは、日本武尊が腰を掛けた腰掛け石、鞍を置いた鞍掛け石、蟹の形をした蟹石、加茂大明神の影向石の四つである。影向石以外はすべて、居醒の清水の中にある。泡子塚の伝説は全国に数多く伝わる西行伝承の一つとしてなかなか興味深い。『三水四石并泡兒墓由来記』には、次のような西行の伝説が記録されている。

又泡沫兒の墓といへるは、往古此里に旅人の為茶店を立て世を渡る夫婦の者有。一人の娘を持。其娘年十四才、容儀他に勝れて誠に孝養の心深切成しかば、父母の寵愛も浅からず。然るに西行法師東に赴かんとの時、此茶店に休足有。彼娘西行に恋慕するの心出るいへども西行はや立さられぬ。娘したふのあまり西行の飲残されし茶の泡をのめり。これより不思議に懷妊しければ、父母疑て娘を責問に娘右の訳を語。終に一男子を産り。父母是を養育するに次第に養兒玉の如く花の如し。後又西行法師東より上り此茶店に休足の折がら夫婦児を抱右の訳を語る。西行奇異のおもひをなし児をいだきてつらく見て曰、雀変じて蛤と成鳩化して鷹と成る。有情変じて非情となり非情化して有情となる。皆天地の化なり。今一滴の泡変じて此兒と成。汝我子なれば元の泡にかへれとて

近江醒井の泡子塚伝説

水上は清き流れの醒ヶ井に浮世の垢を洒てや見ん 西行

と即吟有ければ、不思議成かな忽彼児は消て元の泡と成ぬ。時に西行も実我子なりとて此所に石塔を立て、一煎一服一期終即今端的雲脚泡と書て、若人此所の名を問ば児は醒果し子醒ヶ井と云べしとなり。これ仁安戌子年秋の事なり。これによつて此所初めは西町といひしを今は子醒ヶ井町といふなり。

傳へ聞夢のうき世や醒ヶ井の水の泡児の消るならひと 宗祇

この伝説の性格をとき明かすことが本稿の課題なのだが、わからないことが多すぎる。茶を飲んで懷妊したこともそうだし、西行が、「雀変じて蛤と成鳩化して鷹と成る。有情変じて非情となり非情化して有情となる。皆天地の化なり」と唱えれば、泡と消えたというのも不思議にはちがいないが、この唱えごととも、その出所がわからない。この話について『近江国輿地志略』は、次のように記している。

西行水と云は、西行関東下向の時、此水の辺茶店に暫やすらひたまふに、そこなる女懸想して、茶碗の中の残を呑んではらめる子、むなしく消し謂に、淡子の墓といふあり。此水の流なり。みな人謂らく、さかさま川と南より北へ流るゝなり。

「さかさま川」の言い伝えは、『伊吹町の民話』が「西行法師と泡子塚」に醒井の伝説として紹介している。そこにも、

この墓が泡子塚というのであって、その水は逆さ流れといつて、高い方へ流れているんです。醒ヶ井の水は南の方へ流れているんですけれども、この水だけは北の方へ流れているんで、逆さ流れといつてます

という伝承を記録している。西行水の流れが、「さかさま川」、「逆さ流れ」といわれるのはなぜか。泡子塚の伝承とかかわっているだけに、ぜひ知りたいところだが、これだけの例をつきあわせただけではわからない。ただ泡子塚の伝説は、清流とともに暮らしてきた醒井の水にかかわる信仰と結びついて生まれてきたと思われる。

(三) 一煎一服の碑

西行は泡と消えた我が子を弔って石塔を建て、そこに「一煎一服一期終即今端的雲脚泡」と刻んだ。「仁安戌子年秋の事」である。たしかにいまも西行水の泡子塚にはその碑が立ち、傍らには宝篋印塔もある。一方、この碑にまつわる泡子塚の伝説が、遠く離れた東北で、菅江真澄によって記録されている。これは小堀光夫氏が紹介したもので、秋田市の福地発明氏旧蔵の断簡である。

むかし西行上人ある家に入て茶飲みて出給ひてけるととき、其やとのむすめ、上人に恋して茶碗に残りたる淡をなめてはらみ、やかて子うめり。上人ふたゝひ此宿にいたりて、其子をめしてたなころにのせてふと吹たまへは泡になりてちりぬといへり。あは子の碑あり、其台石に彫て、

一服一煎一期終

即今端的雲脚泡

仁和三年 西行とあり

五輪石也。此ゑり石もといさゝか奥にありしを、近きころこゝにうつせり。そをいかゝして書おとしけん、いぶかしきこと也。

菅江真澄がこれをどこで記録したのか明らかでない。しかし、彼が歩いた東北にも泡子の伝説は残されている。中山太郎は『日本民俗学辞典』に「泡子地蔵」の項を設けて、『日本伝説集』と「金田一京助談」のそれを載せている。二つともにあげておく。

①羽前西村山郡西山村大字水沢の、ある農家で六部を頼んで供養を営んだ。家の娘が六部に愛着し其飲み残した茶の滴を飲み身重となり男児を儲けた。其後六部が又来たので其事を告げると、六部は赤児と去年の茶碗とを手を持ち、呪文を唱へると赤児は元の茶の泡になつてしまった。娘は驚きの余り発狂し池に投身したが

蛇体となつた。六部は後世を弔ふために寺を建て永住した。龍昌寺がそれである（日本伝説集）。

②盛岡市外の農村に伝はる話は、京都の公家が故あつて奥州へ下向し、途中で飲み残した茶の滴を女が飲んで妊娠し男児を生んだ。其児が七歳の折に父親を慕ひて母親から事情を聴き「水子の父は居ないか」と呼ばりつつ各地を尋ねるうち実父に会ひ、同じ床に寝ると元の茶滴になつてしまつた（金田一京助談）。

東北に残る泡子の伝説は、この話の伝承範囲の広さを物語るが、二つともに「一服一煎」の碑文のことではない。しかし真澄の断簡が示すように、東北にも碑文のことを語る泡子の伝説が、たしかに伝えられていたのである。

「一服一煎」の碑文の意味を考えるうえで参考となるのが『七十一番職人歌合』である。その二十四番に「一服一錢」と「煎じ物売」が番にされている。そこにかける「一服一錢」は剃髪つがいの僧形である。丹生谷哲一氏は、「一服一錢」が登場する『煎じ物』、『栗隈神明』、『通円』の狂言を取りあげて、この茶売りの徒が「松離子・鉢叩・声聞師・犬神人など雑芸能の徒と密接不可分の存在であつた」ことを指摘する。これらの散所非人は、罪・穢れをキヨメることを仕事としたのはよく知られているが、寺社門前の「一服一錢」は、死者供養の茶施行であつた。狂言『通円』がそれを示す好例である。この舞狂言は、旅僧の前に通円の亡霊が現れて生前の様子を語る。宇治橋供養の時、茶を点たてすぎて死んだ通円という茶坊主が、幽霊となつて現れ、自分の最期のありさまを謡い舞い、僧に供養を頼んで消え失せる。

さすが名を得し通円が、埋み火の燃へ立つことのなかりせば、湯のなき時は泡も点てられず、跡とひ給へ御ひじりと謡いながら通円は草蔭に消えていく。虎明本の台本は、このあと次の一節を書きとめている。「通円が兄」の「二休」の作として、

一服一錢一期ノ内 最期ノ一念ソノサツ温客ノ泡

近江醒井の泡子塚伝説

という偈をあげ、通円の辞世として「ゆくさきもまたゆくさきも傀儡くわいゐの糸切れぬればもとの木の切れ」の歌を示す。これらの偈や歌は、茶を点て死した通円の供養をすすめるものであろう。茶施行による死者回向が、「一服一錢」の偈に託して行われる。『看聞御記』によれば、時代は遡つて応永年間のことになるが、盂蘭盆会うらなひのとき、伏見光台寺門前の茶屋で「茶接待」があり、諸人群衆したといふ。このような事例に照らせば、醒井の地蔵会でも、かつて泡子塚の「一服一煎」の碑前で茶が振る舞われ、死者の回向が行われていたものと思われる。

(四) 水の中の泡子地蔵

近江八幡の西生来町にも泡子の伝説が残る。しかし、醒井のと異なつて、こちらは地蔵さんと結びついている。老蘇の森に隣する西生来地区、その西福寺の境内にいまも泡子地蔵はある。しかし、かつては川の中にあつたと『近江輿地志略』は伝える。

泡子地蔵堂 西生来村にあり。石仏の地蔵を安置す。土俗相伝。往古此地に村井藤竹と云者あり。妹一人有。往還に茶店を出し、旅人憩息せしむ。或日一僧あり。此処に來り、茶店に憩しに、彼妹旅僧に深く恋慕の情を動し、旅僧の吞あませし茶を吞しに、忽孕ることあつて、十月にして男子を産す。三年の後彼女件の子を懷き川にて大根を洗ふ。△今の大根洗川と云は其故なり。▽旅僧あり。彼川の辺に立留て曰、嗚呼不思議なる哉此子の泣声経文なりと。彼女はを顧に、三年以前恋慕せし処の旅僧なり。女其故を僧に語る。僧奇なりとして其子を吹に、則泡となりて消失ひ、然して曰、此西あれ井と云所の池中に、貴き地蔵あり。彼子が菩提のために建べしと。水をかゆるに、果して石仏の地蔵あり。これを安置す。今の地蔵これなり。件の僧は弘法大師なり。夫よりしてあれ井の文字を改て生来と書。今の西生来村こ

近江醒井の泡子塚伝説

れなりと云。

西行にかわって旅僧は弘法大師となっているが、話に大きな変わりはない。ただ地蔵が池中にあったという点は大変興味深い。これは醒井の「尻冷やし地蔵」と共通する。かの石仏もまた、その初めは川中にあった。先に引用した「禅爾和尚涼燠伝草案」は、石像に「露落懸水」したと記す。

此ノ醒井ノ流水ノ上ニ石像ヲ居ヘ、露落懸水シテ、湖水ニ流入スル鱗ニ、結縁セシメントス。

「露落懸水」とは、おそらく「露ノ落ツルガトク水ヲ懸クル」と読むのであろう。地蔵に水をかけて琵琶湖に入る魚類に結縁したというのである。それならば律僧禪爾の行為は「流れ灌頂」と解釈できる。水中の魚類を救済するために灌頂の幡（旗）を川や海に流すのである。『塵添瑩囊鈔』（巻十五）は「卒塔婆ヲ連ネ縊ノ花ヲ貫キ流ス歟。此水ニ触レン鱗モシクハ無縁ノ死骸白骨等。必ス得脱ノ縁ト成ルヘシ。灌トハ如来ノ大悲也」（「流灌頂事」）とも説明している。いわば死者回向の行為であり、魚介のみならず、水死人や難産で死んだ婦人を回向する民間行事として行われてきた。さらに手元の『密教辞典』（佐和隆研編）によれば、孟蘭盆の頃に行われたこの行事は、既に平安末期にあった風俗らしい。豊山派の寺院では、水辺に塔婆七基、各基に幡幡七流を付けるという。あるいは四角の布の中央に阿字、四隅に、「迷悟三界城、悟故十方空、本来無東西、何処有南北」の四句を書いて、四方を紐で結んで棒に立てて通行人に水を灌がせることもあるという。お盆の頃の地蔵流しや灯籠流しもこれに類する。

醒井でもお盆の地蔵会は盛んであるから、水の泡と消えた泡子を供養する祀りの行われていた時代があったと思われる。それならば西行が碑に刻んだ「一煎一服一期終即今端的雲脚泡」の偈は、流れ灌頂の「迷悟三界城、悟故十方空、本来無東西、何処有南北」の句と同じく、死者回向のために唱えられたのであろう。

西生来の泡子地蔵が、池の中にあったことからすれば、泡と消えた幼い命の菩提を弔って、地蔵に水が灌がれたであろう。水の中にある泡子地蔵の説話は、かつての水子供養の祀りを伝えるものと考えられる。

（五）子撫川の泡子

もう少し他の地域の伝承と較べてみよう。『越中旧事記』下に「子撫川」の伝えが記録されている。子撫川は、富山県小矢部市北部の山間を稲葉山西麓沿いに流れ、田川で小矢部川に合流する。そしてこの地の泡子伝説は、川の名の由来話として語られる。

むかし東国より京師へいたる僧有て、此あたりの家に立より、茶を乞てのむ。此僧美僧にて有しに、其家の娘愛染のころろを生し、僧出てのち、其茶の余瀝いささか、碗にのこりしをのみたり、それより懷妊して一子、をうむ。父母其夫を問とも、答るところなし。かくて此児三歳にいたる時、件の僧帰りつゝ、又此家に立寄、娘しかしかとかたりて、児を引て僧にみせしむ、僧もおもふところの有けるにや、諍ふことはなく、念呪して此児の頂より脚下迄、撫たりしに、泡のことくにとろけたりしを、この川へ流しけるとなり。仍てこの川の名ありと也。又此僧を、弘法大師ともいふなり

旅僧はやはり弘法大師。彼が幼子を撫でると、泡がとろけるように消えたという。撫でれば、子が消える、というこの話にはどういう意味があるのか。花部氏が紹介している類話を参考にして「撫でる」という行為の意味を考えてみよう。佐々木徳夫『むがす、むがすあつとごぬ』（第一集）が収める「あわぶぐど消えた孫」がそれである。宮城県本吉郡に伝わるこの話は、飲み残しの茶を飲んで生まれた子の頭を、回国の僧が三度撫でると、泡ぶくのように消えたと言語。花部氏

は、この呪的行爲を『陰陽師重宝記』（元禄期刊）の例を示して解説している。「こむらがえり」が起きたとき、木瓜でさすりながら、「ばけけけけ」と三度唱えたと治るといのである。

これは「おびんずるさん」（賓頭盧尊者）の民間信仰を思わせる。

この「なで仏」は、患っている部位を撫でれば、その病を治してくれると信じられている。子を「撫でる」という行爲は、こうした民間習俗を背景にしていると考えられる。

花部氏が集めた多くの話のなかに、「茶碗塚地蔵」がある。福島県河沼郡に伝わる話であるが、これも「撫でる」という行爲にかかわって語られる。

だいぶ昔、ここが宿場町でずうと栄えていたと。旅の坊さんがここにきて、茶店で休んで、まだ旅立ったあどで、茶店の茶汲み女が、お坊さんの美貌に惚れちゃって、お坊さんが飲み残したお茶を飲んだと。それで孕んだということで、後に茶店の娘さんが子どもを産んで、育てていだど。そしてまた何年か立って、同じ旅の坊さんが、巡りめぐってここへ来て、茶店に休んだところが、茶店の茶汲み女が、この子どもはあなたの子どもですと。言われで、坊さんは驚いで、子どもの顔をよく見たら、これは人間の子どもじゃない、魔性の子である。ということで、その茶汲み女が大切にしまって置いた茶碗を出させて、子どもに被せだどごろ、子どもが消えちゃったど。それでその坊さんは、茶碗をここに埋めて、地蔵様を造って供養したど。ということが茶碗塚のいわれになっている訳です。

ところが、ここは経塚なんです。梵字の書かった石が相当埋まってるんです。そいでここでは、昔から地蔵さんは子どもの一番大事な遊びの仲間であって、守り本尊である。昔は子どもたちが騒いで遊んで、落ちてもケガはしないんです。子どもの疳の虫、頭が痛い時には、梵字の書いた石をお借りしていつて、悪いところ

近江醒井の泡子塚伝説

を撫でて治った時に納めていく。そしてその時には、腹掛けか帽子を一緒に奉納していく。

この地蔵さんは、もとは街道沿いの河原に立っていたと花部氏の報告にある。そこには「一字一石経塚」があったとも伝えられる。「一字一石経塚」は、醒井の「一煎一服一期終」の碑に類して、死者回向の行われた名残であろう。近くの真言宗寺院恵隆寺が、茶碗塚地蔵の祀りに携わってきたというから、かつて梵字の石を供えて地蔵の祀りが行われたと思われる。梵字の石で「撫でる」習俗も呪的行爲であるから、子どもを撫でて、その無事息災が祈られたのである。

一方、『越中旧事記』の泡子伝説は、地蔵の話ではない。弘法大師が「撫でる」と、子どもは泡のように消えて、川に流したと語るだけである。しかし撫でて流すという行爲を語って、水の泡と消えた子どもは供養としたのである。お盆のとき、子撫川では、どのような死者回向の行事が行われたのか。もう少し子撫川周辺の民俗行事を調べてみる必要がある。今後の課題としよう。

（六）武州の水子観音像

泡子の伝説は地蔵尊に結びつけられるだけではない。観世音の場合もある。『廻国雜記』（四編巻之中・第五「新座郡水子村観音の画像」）がそれである。仏道に帰依することを勧める方便として、泡子の話が語られる。武州新座郡大原の百姓勘当右衛門が所持する観音の画像の来歴を語るところから話ははじまる。ある時、勘当右衛門のところに一人の旅僧（弘法大師）が訪ねてくる。仏法を誘う彼は邪険に扱うが、一夜の宿を貸すことにする。

抑もこの画像の濫觴を聞に、昔天文六丁酉年川越合戦の頃かとよ、ある夕暮年若き一人の旅僧来りて一夜の宿を乞。此家のあるじ日頃邪見にして仏法を破しけるが、機縁にやありけんころよく一

近江醒井の泡子塚伝説

泊を許しけり。此家に二九からぬ年の娘一人ありて、よく旅僧に給仕しけり。翌朝彼僧礼細々と述て出立しける。しかに彼むすめ男に通ぜざるに、月を重ねて懐妊しけるは、怪異といふべし。父母は娘を責て曰、何れの人の子を孕るや速にいふべし。案ずるに恐らくは先頃止宿せし旅僧に通じて胎なるべしと。娘いへらく、旅僧曾て猥の事なし。何ぞ何国の人にか通せん。前後これまでいまだ男に馴し事なければ、我甚不思議におもひこゝろを苦しむと答ふ。しかりといへども正しく懐妊に紛れなければ、密通に定りけり。娘も怪異の事に思へども懐胎したれば力なし。しかるに月みち件の娘男子を出産せり。いよく奇怪といふべし。父母のころには一筋に旅僧の子なりとおもへり。しかりといへども孫なるによつて、流石捨がたく取上てそでんかとも思ひしが、或日件の旅僧ふと入来りて去年止宿したりし礼をのぶるにぞ。父母かねて待もふけたる事なれば、旅僧を呵して曰、去年足下の黄昏に及んで、旅泊に迷ふを労しく思ひ止宿を報謝せしに、恩を仇にて報じ娘へ徒し、剩さへ懐妊せしめ、既に昨日男子を産り。悪き仕業目にもの見せん。早々赤子をいだき行べしと立腹大方ならず。繼で仏教を譏り法師をさまゝに悪口しけり。旅僧答て、我曾て猥がはしき心なければ、争か徒に奸淫せん。豈何ぞ虚偽をいはんや。愛女をよく糺されなば明白たるべし。但しわれ此家に一宿せしを以てかゝる無失の汚名を得たるぞ是非なし。その産るゝ子何方にありやと、父母則ち産所に入て彼赤子をいだき出つゝ、僧に迫るに僧則ち左りの手の平に乗て謂て曰、我さらに密通せざれば、我子にあらざる証拠を見すべしと、口をひらき息を以て彼赤子を吹けば、不思議や須臾に赤子の形勢髣と消失、水に解て手の平に只水のみ残れり。家族一同奇怪のほど驚くに堪たり。彼僧硯を乞つゝ、件の水を硯へたらし、墨摺流して観世音の像を画きていえらく、生るゝ子もし鬼蛇なりといふとも、汝等が為に血筋の孫なれば、

如何せん。しかるに今赤子は泡と化し、今又観世音の御姿となりしこそ、是汝等がとし頃悪業の所感、娘にせまり孫と化して善道に入らしめ玉ふ。仏陀の方便なれば今日より速に平生の所行をあらため、悪心を翻して善道に趣くべしといひ終るや否や、忽爾として旅僧の形消失て観音の画像ばかりぞ残りける。実に不思議といはんか。今勘右衛門方に安置する靈妙の画像これ也。

それからこの村を水子村と言ひ慣わすようになったと結ばれる。泡子の不思議が繰返し強調されることで、話は奇談としての色合いを帯びてきている。弘法大師は、勘右衛門を善道に導くために観世音の画像を書き与えて消えたのである。この画像の靈験いちじるしく、大師の命日三月二十一日には、近村の男女歩みをはこび市をなしたと語られている。

観音の画像が現に存在したのか、その真偽は不明である。しかし、脚色されて、泡子の伝説は靈験譚の体裁を整えている。すなわち、泡子の供養を語って、仏菩薩の縁起とする点である。この観音の靈験譚は、あるいは実際に説教の話材となっていたことも考えられる。ともかく『廻国雜記』の話をみるかぎり、泡子の伝説は、文芸化の道をたどっているように思われる。しかし、はかなく消えた泡子を弔おうとする心意は、たしかに語りつがれている。水子という村の名の起こりを語るところにも、供養の心はあらわれている。

(七) 醒井地蔵と泡子塚

醒井の泡子伝説の性格を知るために、各地の例と比較してその特徴を論じてきた。醒井の伝説は、「尻冷やし地蔵」と結びつけて語られることはない。むしろ地蔵との関係は否定されている。

地蔵像 醒井川中にあり。土俗尻冷の地蔵と云。伝教大迦の作。泡子の地蔵といふものは非なり。泡子の地蔵は蒲生郡にあり

と『近江輿地志略』は説明する。なるほど「尻冷やし地蔵」とはいうが、泡子地蔵とはよばない。しかし、前にも述べたように、長らく川中であつたことが重要なのである。「此ノ醒井ノ流水ノ上ニ石像ヲ居ヘ、露落懸水シテ、湖水ニ流入スル鱗ニ、結縁セシメントス」と述べられるように、結縁・灌頂が行われたのである。それならば地蔵会には、泡子供養がいとなまれても不思議ではない。

居醒の清水、十王水、そして泡子塚の西行水、この三水はいずれも醒井川の流れの中にある。ことに十王水は、地蔵尊ゆかりの名である。ここにあつた十王堂にちなんで命名されたという（『三水四石并泡兒墓由来記』）。もちろん『地蔵十王經』という經典があるように、地蔵の十王信仰にちなんだ命名である。『由来記』は「十王水」の由来を次のように語る。

十王水といふは延喜の聖代に浄蔵貴所といふ大徳あり。諸国遍歴したまふに仲算大徳此所に結縁の為に清水を出し玉ふと聞たまひ、我も結縁せんと山根に至り岩の元を少し凹玉へば、清水滾々と湧出る。是も其後は大旱魃にも水絶る事なし。然れば浄蔵貴所水といふべきを、此所に十王堂ありしゆへふと十王水と云傳ふなり。浄蔵貴所は三好朝臣清行の第八子、母は嵯峨帝の皇孫なり。

この地に溢れる清水をもたらしした浄蔵貴所は、『地蔵菩薩靈驗記』によれば、「地蔵の化身」（巻第二）とされている。絶えることのない清水への感謝の念が、この由来譚のうちに語られている。その水が十王水とよばれるのも、地蔵と清水に寄せる篤い信仰を伝えるものだろう。

同じ地蔵川（醒井川）の清流にあつて、「尻冷やし地蔵」と泡子塚が無縁であるはずがない。ともに死者供養の役割を担ってきたのである。醒井の地蔵尊は、加茂大明神の託宣によって彫られた。水の神ゆかりの地蔵さんは、長らく清流の中にいて、人々の罪や汚れを流してきたのである。一方、西行水の泡子塚も水子供養の役割を果たしてき

近江醒井の泡子塚伝説

た。なにより「一煎一服一期終即今端的雲脚泡」という泡子の碑文が、それを明瞭に物語っている。

醒井の地蔵と泡子塚の結びつきを語る文献も伝承もない。しかし、旧暦の七月二十三、二十四日の地蔵会が、どのように営まれていたか、それを調査することでこの課題は明らかにしてくれるのではない

(注)

(1) 平成十三年度・平成十五年度科学研究費補助金（基盤研究B・1）研究成果報告書

(2) 小林幸夫「滋賀県坂田郡米原町醒井周辺の西行伝承資料」前掲（1）報告書所収

(3) 柴崎昭和「今津文庫蔵『法金剛院雜記』所収「禪爾和尚涼煥伝草案」」（『禅学研究』 第六十八号）一九九〇

(4) 伊吹山麓口承文芸学術調査団「伊吹の民話」和泉書院・一九八三

(5) 小堀光夫「資料 菅江真澄の記した西行伝承」（『西行伝説の説話・伝承学的研究（第二次）』所収）二〇〇四

(6) 丹生谷哲一「一服一銭茶小考」（『立命館文学』五〇九号所収）

(7) 同『検非違使——中世のけがれと権力——』（IV「散所非人」）平凡社・一九八六

(8) 前掲（6）丹生谷論文

(9) 堀一郎によれば、流れ灌頂は、中世ではイタカの専業であつた。小卒塔婆を手に持ち、「流れ灌頂させ給へ」と唱えて五條橋下に座すイタカの姿が『七十一番職人歌合』に見えている。イタカは座死者などを供養する念仏聖系の徒であろうと堀は推定している。そしてまた唱門師に類する雑芸能の徒でもあつた。（『我が国民間信仰史の研究』（二）宗教史編）創元社・一九五三

(10) 前掲(1) 所収花部論文

(11) 丹生谷哲一氏は「一服一銭茶小考」で、茶屋が菊作りに携わっている事実に触れて、重陽の節句の風習を紹介している。「菊は河原者や散所者が作るのを常としたので、とくに、重陽の節句では、禁裏において、九月八日に諸方より松、内蔵頭より菊綿Ⅱ「菊のおなか」、が進上され、御庭者が菊を植え、菊綿を着せた。そして、九日の早朝、その露にぬれた綿で肌を撫でることと老いを棄てる、という風習であった」。散所者の「撫でる」行為も、寿命長久を祈る呪的行為であらう。

(12) テキストは大島建彦・渡邊守邦・小野尚志編『遊歴雜記』三弥井書店・一九九五

(付記)

本稿は平成十三年度～平成十五年度科学研究費補助金(基盤研究B・1)による研究成果の一部である。

(本学教授)